

機関番号：23901  
 研究種目：基盤研究C  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19520245  
 研究課題名（和文）日系二世知識人とアフリカ系アメリカ新聞—異人種間共闘をめぐる語りの比較分析  
 研究課題名（英文）Japanese American Nisei Intellectuals and African American Newspapers — A Comparative Study of Narratives on the Interracial Alliances  
 研究代表者  
 村山 瑞穂 (Murayama Mizuho)  
 愛知県立大学外国語学部英米学科教授  
 研究者番号：70230018

研究成果の概要（和文）：日系アメリカ人二世の知識人、ヒサエ・ヤマモト、S・I・ハヤカワ、ユリ・コウチヤマが、それぞれ、ロサンゼルス、シカゴ、ニューヨークのアフリカ系アメリカ新聞に寄稿していたコラムの「語り(narrative)」を検証し、第二次大戦中から戦後にかけての人種差別をめぐる日系二世とアフリカ系アメリカ人の政治・文化的共闘のありようとその問題点を分析した。ただし、コウチヤマについては、資料の収集困難のため、十分な分析が果たせなかった。

研究成果の概要（英文）：I examined the columns that Japanese American Nisei (second generation) intellectuals, Hisaye Yamamoto, S.I. Hayakawa, and Yuri Kochiyama contributed to African American Newspapers published respectively, in LA, Chicago, and New York City during and after World War II, and through the comparative analysis of those narratives, found the complex issues on the interracial alliances on the cultural as well as political aspects..

#### 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	800,000	240,000	1040,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総計	1500,000	450,000	1950,000

研究分野：アジア系アメリカ文学・文化

科研費の分科・細目：人文学B・文学

キーワード：米文学、アジア系アメリカ研究、日系アメリカ人、アフリカ系アメリカ新聞、第二次世界大戦、人種差別、異人種間共闘

#### 1. 研究開始当初の背景

##### (1) 研究動向の概観

アメリカにおける民族研究(Ethnic Studies)は、個々の民族的マイノリティ集団の政治・文化的アイデンティティの確立を掲げて発足したが、近年の研究は、ジェンダー、階級、セクシュアリティ等の視点を取り込むことにより、アイデンティティそのものの多元性を可視化するとともに、人種・民族の境

界を越えた相互関係を重視し、真の多文化主義社会実現へ向けた関係構築を目指す方向へ進んでいる。

なかでもアジア系アメリカ研究においては、70年代から80年代にかけて、アジア系アメリカ運動における他の人種マイノリティ、なかでも最大のグループであるアフリカ系アメリカ人との政治・文化的共闘関係が際立ったが、1992年のロサンゼルス暴動は、

むしろ両者の葛藤、対立を印象づけることになり、あらためて、二つのグループの関係性の再検証が求められている。

## (2) 着想の経緯

研究代表者は、学際的性格を持つアジア系アメリカ研究のなかでも文学研究に足場を置き、近年は日系二世作家ヒサエ・ヤマモトの(Hisaye Yamamoto, 1921-2011)作品における異人種間関係のテーマに関心を寄せてきた。優れて技巧的なヤマモトの短篇群は、主にジェンダーとエスニシティが交錯するテキストとして評価されてきたが、ロサンゼルス暴動以降、異人種間関係のテーマを扱う短篇について、幾つかの論文が発表されている。それらの論文は、ヤマモトが第二次大戦直後から3年間、ロサンゼルスのアフリカ系アメリカ週刊新聞、『ロサンゼルス・トリビューン』のスタッフおよび専属コラムニストとして働いていた事実に注目しているものの、新聞の記事やコラムそのものを調査した形跡はない。研究代表者は、これらの収集、分析を進めるなかで、ヤマモトの短篇についての新たな解釈の可能性とともに、こうしたコラムの分析が、二つの人種グループの関係性を検証するのに有効な資料となりえるという認識を得た。

当時、日系二世がアフリカ系アメリカ新聞に継続してコラムを持つことは、実に稀な例ではあるが、ヤマモトのほかにも、S. I. ハヤカワ(Samuel Ichiye Hayakawa, 1906-1992)とユリ・コウチヤマ(Yuri Kochiyama, 1921-)に類似した事例があることがわかった。本研究ではそれぞれ、異なった個性、背景を持つ三人のコラムの「語り」を比較分析することによって、人種差別に対抗する政治・文化共闘をめぐる日系人とアフリカ系アメリカ人の関係をより深く掘り下げ、問題の多面性を明らかにすることとした。

## 2. 研究の目的

日系アメリカ文学では古典としての位置を占めている短篇集の作者、ヒサエ・ヤマモト、言語学者として国際的な知名度を持ち、アメリカ本土の日系人初の上院議員ともなったS・I・ハヤカワ、マルコムXとの親交でも知られる政治活動家、ユリ・コウチヤマの三人が、それぞれ、ロサンゼルス、シカゴ、ニューヨークのアフリカ系アメリカ新聞に一定期間、寄稿していたコラムを収集し、それらの語りを分析し、比較検討する。

これにより、ジェンダーや階級、アメリカの都市の差異など、様々なファクターを含んだ両人種グループ間に存在する多面的な問題を日系アメリカ人側の視点から明らかにする。それはまた、研究代表者の専門領域である文学のテキスト分析を歴史研究と接続

させる分野越境的な新しい試みでもある。

## 3. 研究の方法

(1) ヒサエ・ヤマモトのコラムについては、研究代表者によるヤマモトの短篇研究の一環として部分的に調査済みであり、これを補う形での国外での資料収集を行い、分析を進めた。また、コラムに登場する複雑な人物関係の把握などのために、ロサンゼルス在住のヤマモト本人および当時からの親友である劇作家としても評価の高いワコ・ヤマウチへのインタビューを実施した。

(2) ハヤカワについては、民族研究の導入などのカリキュラム改正を求めるサンフランシスコ州立大学における学生運動の際、保守派教授陣の先頭に立ち、これを阻止しようとした経緯から、アジア系アメリカ研究では問題視されてきた人物である。本研究では、ハヤカワの著作や基本的な文献からコラムの収集までを、国内外で実施した。とくにコラムはUCLAライブラリーで複写、収集し、分析、検証を行った。また、このテーマに関連してUCLAアジア系アメリカ研究センターの研究者との意見交換を行った。

(3) コウチヤマについては、伝記等の資料が出版され、スピーチの場面など映像記録も残されているが、彼女が書いたテキストについての分析は行われていない。本研究では、50年代、60年代にハーレムでコウチヤマが執筆、発行していたファミリー・レターがアフリカ系アメリカ新聞として認知されているため、この収集を試みた。

## 4. 研究成果

(1) ヒサエ・ヤマモトと『ロサンゼルス・トリビューン』

『ロサンゼルス・トリビューン』(以下LTと略)は1941年に創刊され、1960年まで続いた小規模のコミュニティ週刊新聞であり、ヤマモトは終戦直後の1945年から3年間、ここでスタッフとして働きながらコラム“Small talk”でエッセイを連載していた。その背景には特殊な歴史的経緯がある。戦時中、日系アメリカ人の強制収容によってゴースタウン化していたリトル東京に、軍需景気で沸く西海岸に仕事を求めて南部から押し寄せたアフリカ系アメリカ人が入り込んでいたが、終戦後は、日系人が強制収容から帰還し、両グループがこの限界で共存するという状況が生まれていたのだ。やがて地域は日系コミュニティへと再編成されるが、ヤマモトがコラムを担当していたのは、この共存期間に重なる。

連載エッセイは、身近な出来事から書評、映画評、政治問題まで非常に広いトピックを扱っており、ことに日系社会の日常生活を細やかに描くエッセイが、新聞の主な読者であ

るアフリカ系アメリカ人の日系人に対する人間的共感や異文化理解を促進したであろうことは容易に推測できる。また、これらのエッセイのなかに後のヤマモトの短篇と重なる部分があり、コラムがヤマモトの短篇習作の場となっていたことも判明した。

一方、ヤマモトのエッセイで、LTの人種問題への先鋭な政治意識を反映した部分からは、彼女が人種差別への抵抗と共闘においてLTと基本的な姿勢を共有しながら、両者の間には葛藤もあり、その溝は最終的に埋まらなかったことが読み取れる。その原因としては、人種差別問題に対する両グループの温度差、日系アメリカ人のアフリカ系アメリカ人に対する根強い偏見と白人社会への同化志向、他の人種マイノリティ以上にアフリカ系に対する差別を強化するアメリカ白人主流社会の動きが考えられる。さらに、ヤマモトの本質主義的人種観への懐疑と平和主義者としてのスタンスが重要である。とくに、人種差別の暴力への対抗手段としての非暴力主義の有効性について、LTの女性編集者アルメナ・デイヴィス・ロマックスとヤマモトとの間で論争になったことが明らかになった。

こうした分析を基に、ヤマモトの短篇”The High-Heeled Shoes”を読み直し、従来、セクハラの問題、つまり性暴力がテーマとされてきたテキストの裏に、人種差別と暴力、そしてそれに対する非暴力主義の有効性についての葛藤を読む新解釈をアメリカの学会で発表し、議論を呼んだことは大きな成果であった。しかし、口頭発表では語り尽くせない部分もあり、今後は、発表原稿を加筆、訂正し、国際ジャーナル掲載を目指したい。

## (2) S. I. ハヤカワと『シカゴ・ディフェンダー』

『シカゴ・ディフェンダー』(以下CDと略)は、1905年創刊以来、現在も続いている大手アフリカ系アメリカ新聞である。調査の結果、ハヤカワは1942年12月から4年間、コラム“Second Thought”に、エッセイを連載していたことがわかった。ハヤカワがコラムを始めた同時期に、CDはニューヨークで活躍していたアフリカ系アメリカ人詩人ラングストン・ヒューズなど他に4人のコラムニストを新たに招いている。これは、CDがアメリカの第二次世界大戦参戦を機に、アフリカ系アメリカ人が、いわゆるダブルV、国外でファシズムと戦うと同時に国内の人種差別と戦い、ともに勝利を目指すというキャンペーンの先鋒を担ぎ、そのための議論を活発化するためだったと思われる。

ハヤカワは、当時、シカゴ工科大学で教鞭を取っており、彼の著作 *Language in Action* (1941) はベストセラーとなっていた。これ

は、言語学の意味論( semantics)の本であり、ファシズムや人種差別のメカニズムを言語学的に解説し、批判する部分を含んでいた。実際、コラムにはこうした彼の知見が紹介されており、言語学者としてのハヤカワの見解は、CDのダブルVキャンペーンと合致するものだったことがわかる。また、戦時に国内の人種差別を告発するCDの方針を国家の団結をそぐものとする批判に対しても、ハヤカワはしばしばCD側の立場を擁護している。さらに、日系収容についても、人権無視の人種差別政策であると批判し、ラディカルな姿勢を示している。

しかし、この時期は帰化法改正以前であり、カナダ出身のハヤカワはまだ日系アメリカ人ではなかった。強制収容されることなく、シカゴで自由に活動を続けるハヤカワの周辺を写すエッセイは、日系アメリカ人の過酷な現実を隠蔽する効果ももたらしたと思われる。これは、キャンペーンの一方で厳然としてあった国内の人種差別から生じるアフリカ系の厭戦気分を抑えることに貢献しただろう。このように、ハヤカワの人種差別に対抗するラディカルな語りは、同時に当事者意識を欠いたエリート主義を露呈するアンビバレントな側面も含んでいた。

エッセイは、その他、書評や芸術評論などを含めた幅広いトピックを扱っているが、ラディカルさとエリート主義のアンビバレンスは、ジャズ評やロサンゼルスズート・スーツ暴動を扱った記事などに表れており、ハヤカワ後年の保守化を予感させる。

上記分析結果を、今年度7月にMESA(多民族学会)で発表する予定である。発表原稿は学会ジャーナルに投稿したい。

## (3) ユリ・コウチャマ

まず、彼女がアフリカ系新聞に寄稿した記事がないかどうか、先行研究等をもとに調査したが、残念ながら、そうした事例は確認できていない。コウチャマ一家は、50年代に *Christmas Cheers*、60年代に *North Star* というファミリー・レターを発行していたことが知られているが、これらについても収集できなかった。UCLAのアジア系アメリカ研究センター図書室がコウチャマのアーカイブを持っているため、そこで資料にあたる予定だったが、不慮の事故により図書館が閉鎖になり、コウチャマ関係の資料も整理中でアクセスできない状況に陥っている。今後は、センター・スタッフから紹介されたコウチャマの娘さんとの交流によって、資料の確認等を進めていく予定である。

## (4) 派生的な成果

本研究によって、あらためてアメリカの人種差別問題を考える上で、アジア系アメリカ人とアフリカ系アメリカ人の関係の重要性についての認識が促された。これに関連して、

本研究から幾つかの派生的成果が生まれた。まず、アジア系アメリカ運動の時代から今日までの、アジア系アメリカ人の詩およびその朗読パフォーマンスにおけるアフリカ系アメリカ音楽、とくにジャズとヒップホップの影響を論じ、両者の文化的共闘の時代的変遷を追った論文をまとめた。また、昨今注目されるアジア系アメリカ文学研究における精神分析批評の導入に関連して、アン・アンリン・チェンの *The Melancholy of Race* (2001) を取り上げ、アジア系とアフリカ系の両者に適応できる人種差別に関する社会心理学的メカニズムを解明し、それに基づく解釈により、それぞれの文学テクストを関連的に扱う斬新さを評価する論文を発表した。さらに、2009年の日本アメリカ文学会においては、アメリカ文学・文化テクストに表象される異人種間関係を、アフリカ系、アジア系、ヒスパニック系など多様な視点から検証する必要性を、多様な人種の背景を持つオバマ大統領の誕生とも結びつけて提案するシンポジウムを企画し、司会および論文発表を行った。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

村山瑞穂、「アジア系アメリカ文学における精神分析批評の可能性」、*AALA Journal*、査読有、No.14、pp.17—26、2009年3月。

村山瑞穂、「ジャズからヒップホップへ?—アジア系アメリカ詩のパフォーマンス」、*AALA Journal*、査読有、No. 13、pp. 29—36、2007年12月。

[学会発表] (計 2 件)

村山瑞穂「アジア系アメリカ文学における *interracialism*」第48回日本アメリカ文学会全国大会・シンポジウム『アメリカ文学・文化における *interracialism*—二十一世紀アメリカを展望する』、秋田大学、2009年10月。

村山瑞穂 “Hisaye Yamamoto, the *Los Angeles Tribune*, and the Suppression of Color in “The High-Heeled Shoes, A Memoir””, *Association for Asian American Studies Annual Meeting at New York, April, 2007.*

[図書] (計 3 件)

村山瑞穂「アジア系アメリカ文学にみる異人種間関係—ポストエスニック時代の異人種間結婚のテーマを中心に」『アジア系アメリカ文学を学ぶ人のために』世界思想社、pp. 340—357、2011年(近刊)。

村山瑞穂『『ノー・ノー・ボーイ』にナショナリズムの機制を読む—二十一世紀の視点から』『国家・イデオロギー・レトリック—アメリカ文学再読』南雲堂フェニックス、pp. 252—273、2009年。

村山瑞穂「オリエンタリズムの彼方に—カレン・テイ・ヤマシタのブラジルの森をめぐる二つの小説が提示するエコロジカル・ヴィジョン」『木と水と空と—エスニックの地平から』金星堂、pp. 29—44、2007年。

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]

ホームページ等  
なし

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

村山 瑞穂 (MURAYAMA MIZUHO)

愛知県立大学外国語学部英米学科・教授

研究者番号：

7 0 2 3 0 0 1 8

(2) 研究分担者

なし ( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ( )

研究者番号：